



序論

本研究は、陶による造形で使われる型成形から生まれるかたちや特性を明らかにし、型成形を活用した陶による造形表現を探るものである。陶による造形で使われる型成形は、技法書に量産の手法であると書かれていることが多い。しかし、筆者は型成形で制作をする中で、量産以外の目的もあるのではないかと考えたことが本研究の背景である。型成形には量産以外の目的、特性があるのではないかと。さらに、その特性により型成形特有のかたちを作ることができるのではないかと。以上の問いを明らかにすることで、型成形を活用した陶による造形表現を探り、筆者自身の制作に生かすことを目的とした。

第1章 陶による造形について

第1章は、型が陶による造形で使われる理由を探るため、まず陶による造形について考察した。土の特性や陶による造形の制作過程を明らかにすることで陶による造形について定義を行った。素材である土の成り立ち、土で成形すること、土が陶になる過程、陶芸家八木一夫の言葉、評論家金子賢治の論文などから考察し、陶による造形とは土という素材で作られ“土の限界、制限”を受けつつも“成形－乾燥－焼成”の制作過程を経たもの、かつ作者が一貫して制作したものだとして結論づけた。

第2章 型について

現在、型は量産の目的で利用されることが多いと思われる。しかし、筆者は制作をする中で量産以外の特徴もあるのではないかと感じることもある。そこで第2章では、“型には量産以外の目的がある”と仮定し、陶による造形やその他の素材で使われている型の調査から考察した。調査から、型のマッピングを行い、3つの軸で8つのエリアに分けた。結果として、量産以外に“形に沿わせる”、“区別する”、“素材をおきかえる”目的があることを明らかにした。

第3章

型成形を活用した作家と作品の考察

第3章では、型を活用した作家と作品を選び、文献調査やインタビューによって、実際にどのように型が表現へと結びついているのかを探った。本論で選んだ作家と作品は、中村錦平《土瓶》、板橋廣美《白の連想》、長江重和《列なりのかたち》《泥彩薄層のかたち》、垣沼千亜季《grounding flower》である。比較考察の結果、陶による造形において、型を使う際、一手段としての立ち位置と、制作の出発点という立ち位置の2つがあると思われた。また、4人の作家と5つの作品は、制作の出発点は違うものの型だからこそできる表現が作品に示されていた。

第4章 型と陶による造形の関係

第4章では、型成形を活用した際の、陶による造形の特性とかたちを探った。前章を踏まえ、陶による造形において型を使っているかたちは、“すき間があるかたち”、“テクスチャをうつしとったかたち”、“粘土に模様があるかたち”、“型の影響を受ける部分と型の影響を受けない部分が共存したかたち”、“内部の空気が圧縮されたかたち”の5つがあるとした。さらに、型からつくったかたちを組み合わせる別のかたちを作る表現方法もあるとした。また、陶による造形における型成形での表現について、他の技法（ロクロ技法、手びねり技法）との組み合わせによるかたちと表現を筆者自身の作品から探った。

第5章 修了制作報告書

作品《歪み》では女性をモチーフにして、女性という“枠”に付随する固定概念、“女性らしさ”、これへの嫌悪感をテーマに制作をした。筆者は、小さい頃から“女性らしく”あることに嫌悪感を抱いていた。なぜ女性だからこうしなさいと決められなくてはいいないのかと考えていた。これは社会が生み出した女性に対する“偏見”なのではないか。そのとき、自分の内面と外から求められる在り方にズレがあると気づいた。“女性らしい”ものを取り込んでいない自分を否定されているように感じ、同時に、なぜこのような“女性らしさ”を社会では当たり前のように受け入れているのかと思い、嫌悪感を抱いていた。これらを踏まえ、型成形で作るかたちや手びねりの意味合い、装飾を利用して、“女性らしさ”への嫌悪を示した。女性という“枠”は、社会の中でカテゴライズされるための“枠”であり、自分で選んだものではない。しかし、社会から女性という“枠”を与えられ、それに付随する固定概念を受け入れることで、“枠”に収まるように強要されているように筆者は常々感じるのである。今回は“枠”の中でも女性に注目して制作をしたが、作品《歪み》を通して他の“枠”をモチーフにできるのではないかと考えるに至った。

結論

筆者はこれまでの制作、そして作品《歪み》の制作で、凹割型による型おこし技法を使用していた。いつも何気なく型に土を貼りこみ、型を合わせ、かたちを作り、そのかたちを組み合わせる作品を作っていたが、これは可塑性によってかたちが保持されているからこそできる工程だと改めて認識した。凹割型だからこそできる外から視認できない内部空間を持つかたち、そして、型からうまれたかたちを組み合わせる、新たなかたちを作り出すことは、型成形の特性とかたちを活用した作陶の根幹を成すものとなりえ、創造力を補完し豊かな創造の可能性があると結論づけた。



歪み Distortion 1820×2730×1820 mm 陶 2019 年 撮影：椎木広